

実験脳損傷を作成した。衝撃圧は 7.0 atm とし、実験動物は衝撃後24時間、72時間と7日目に灌流固定を行った後光学顕微鏡および電子顕微鏡にて検索した。各群5匹を対象とした。光学顕微鏡所見では、外傷性くも膜下出血と脳室内出血および局所脳挫傷は各群に共通した所見としてみられた。その他脳梁部および脳室上衣下に輪状出血がみられた。また脳梁部出血単近傍には、72時間と7日目群に axonal retraction ball が認められた。電子顕微鏡所見では、24時間群ではミトコンドリア、dense body の増加を伴った先端が肥大したこん棒状の Axon がみられ、更に72時間群、7日目群では上記所見に加え neurofilament の増加を伴った axon が散見された。〈まとめ〉 diffuse axonal injury の人剖検例とラット重症脳損傷モデルの形態学的特徴の解明を行った。

第31回新潟化学療法同好会

日時 平成4年6月20日(土)
午後4時
会場 ホテルイタリア軒

一般演題

1) 喀痰分離菌の最近の動向

尾崎 京子・小柳 典子(新潟大学医学部)
高野 操・関根 昌江(附属病院検査部)

当院の喀痰培養分離菌について、外来患者検体を中心に年次的に分離頻度を検討したので、薬剤感受性の結果とあわせて報告する。

1984年以降主な分離菌は、*H. influenzae*, *S. pneumoniae*, *B. catarrhalis*, *P. aeruginosa*, *S. aureus* で、これらで全体の80%以上を占めていた。*H. influenzae* は1986年までは50%弱にみられていたが、1987年より減少し始め、1991年は22.5%と分離株数、割合とも減少していた。*S. pneumoniae* は1987~1988年において最も分離数が増加したが、その後やや減少し、1991年では全体の17.2%であった。他の菌種もいずれも分離数、割合とも増加し、菌種間の差が少なくなっていた。

薬剤感受性では、*H. influenzae* の β -lactamase 産生は10.4%であり、CMX, CFTM, OFLX が良好な MIC を示した。*S. pneumoniae* は PCG 中程度耐性が12.5%で、IPM, CMX, CFTM が良好であった。OFLX は悪かった。*P. aeruginosa* の喀痰分離菌の OFLX は耐性が多かった。

2) 当院の *Enterococcus* の感受性

金子 陽子・石橋美由紀(厚生連中央総合)
吉田真理子・田中 恵子(病院検査室)

〔はじめに〕当院の *Enterococcus* の分離状況と薬剤感受性を調べ若干の知見を得たので報告する。

〔方法〕対照は、1989年・1990年・1991年の約3年間とした。

〔結果〕*Enterococcus* の検出は、総分離株数の8.3%で *E. faecalis*・*E. faecium*・*E. avium* の割合は、7:2:1であった。

E. faecalis の薬剤感受性は、IPM, ABPC, TFLX に感受性を示したが、セフェム系薬剤には耐性であった。*E. faecium*, *E. avium* は多くの薬剤に耐性を示した。年度別薬剤感受性において MINO に変化がみられた。

〔考察〕*E. faecalis* の薬剤感受性で、ABPC が44%にしか感受性を示さなかったことと、年度別感受性の MINO の変化は、感受性検査に使用した培地の種類によるものと考えられる。

3) 当院における *H. influenzae* の β -lactamase 産生性についての検討

塚田 弘樹・星野 重幸(厚生連中央総合)
病院内科

金子 陽子・吉田真理子
田中 恵子・石橋美由紀(同 検査室)

グラム陰性桿菌の薬剤耐性はほとんどが β -lactamase 産生に基づくといわれている。*H. influenzae* の β -lactamase 産生率はそれほど高くはないが、 β -lactamase 産生菌に対する *H. influenzae* 耐性菌は確実に増加しているという報告もある。今回我々は、最近3年間に分離された *H. influenzae* について、 β -lactamase 産生性と薬剤感受性に関する検討を行った。

当院の β -lactamase 産生 *H. influenzae* は10~20%の頻度で、内科においては平成3年の頻度が増えていた。 β -lactamase 産生菌の分離された内科患者は、慢性下気道感染患者が多かった。 β -lactamase 産生菌の ABPC, PIPC 耐性率は40%以上で、全菌の耐性率に比べ、3倍以上であった。CMZ 低感受性菌がかなり認められたが、CMX 感受性は高かった。一方、ABPC 耐性かつ β -lactamase 非産生の株が増加傾向にあり、 β -lactamase 産生株と ABPC 耐性株が一致していないことから、 β -lactamase 産生以外の、PBP の変化や、菌外膜の薬剤透過性変化が耐性機序に関与している可能性が示唆された。